

小学校

感性働かせ、「自分ごと」の学びを

图画工作



岡田 京子 東京家政大学教授

(上)

图画工作科では、絵の具、紙、粘土などの材料を使い、表現と鑑賞の活動に取り組む。自らの感性を働かせた体験活動がなければ、授業は成り立たないともいえる。重要なのは、子どもが体験しきを「自分ごと」にすること。小学校图画工作科の「体験と学習」に関して、岡田京子・東京家政大学教授に聞いた。そ

体験と学習

12

の内容を上・下で紹介する。

◇

图画工作科の学びと関連付けると、子どもが自らの体を使って感じたり考えたりする体験活動は重要である。学習指導要領では、随所に「手や体

全体の感覚などを働かせ」というフレーズがある。体験活動が大切な理由の一つといえる。

こうした点を押さえた上で、学習指導要領を詳しく見ていくたい。例えば、表現における発想や構想に関しては、活動に対して「感覚や気持ちを生かし」や「感じたこと、想像したことから」とい

う言及がある。着目したい点は、全ての活動で共

う言及がある。着目したいというわけではない。

いるかを、教師は振り返る必要があるだろう。見たり触ったりなどの体験を通じ、感性を働かせながら学びを自覚するのは子どもたち自身である。言い換えると、图画工作科の授業は「自分の能力について示された「共通事項」のところで、子どもの活動を通して感じたり考へたりする体験活動は、感覚や行為を通して」と述べられている。

なく一つの題材が終わ

る。しかし、体験すればよいというわけではない。

は、必ずしも子どもたち自身である。ここでも「自分の感覚や行為を通して」とある。毎回の授業だけで

世の中には多くの情報

がありふれている。自らの

身体を通して感じたり考へたりしたことで、当事者意識が高まっていく。

その際、子どもの考え方

引き出す教師の問い掛け

も重要なとなる。

こうした工夫により、

子どもたちの「これをや

ってみたい!」という創

造しようとする豊かな心

造られる。感性を働かせられる。感性を働かせられた体験活動がなければ、「自分にとつて必要

なもの学びとして成立して

はならないともいえる。

さらに、目標に示されている「学びに向かう力、人間性等」に関わる部分では、「感性を育み」という言葉が使われている。この「感性を育み」と活動を価値付けることも大切である。

图画工作科の授業は体験活動が多く、子どもたちが楽しそうに活動に取り組む姿がよく見られる。こうした工夫により、子どもたちの「これをやり組む姿がよく見られる。こうした様子は教師にとって安心材料になる」とつて、安心材料になる

ため、教師の大半は体験の重要性を認識しているだろう。

图画工作科の学習で

は、子どもが自らの身体

性を發揮し、さまざまな

活動を通して実際に体験するという機会が多い。

そのため、教師の大半は

もの学びとして成立して

いるだろう。

小学校

岡田 京子

東京家政大学教授

(下)



自作撮影、コメント考え方振り返り

图画工作

13

コロナ禍が明け、現在は通常の教育活動が戻ってきている。しかし、新型コロナが流行している間は、子どもたちが学校に通えないような時期が続いた。久しぶりに登校ができたとき、图画工作科の授業で、子どもたちは通常よりもさらに「夢中でつくる」ような状況があつたと聞いている。

体验と学習

图画工作で、子どもたちが学校で、周りに友達ができるところを改めて認識できた。友達と一緒に活動することで、材料と向き合いながら「みんなで何かをしたい！」という意欲が一層高まるからである。そう考えるや直接受けた感覚の重要性を再認識できたと感じている。

GIGAスクール構想により、1人1台端末の学習環境が整った。图画工作でも、表現と鑑賞で活用されている。例えば、鑑賞の資料を自分の手元で拡大するなど、子どもが自らのニーズに合わせて学びを工夫していくことができるようになつた。振り返りのときに1人1台端末を活用した実践も多く見られる。ある。また、子どもの姿と向かい合いながら「みんなで何かをしたい！」という意欲が一層高まるからである。そう考えるや直接受けた感覚の重要性を再認識できたと感じている。

留意したいのは、振り返りを単なる作業とならないようにすることがある。大切なのは、作品を撮影したり、言葉でまとめていたりしながら、感じ取れたり考えたりすることだ。画像を撮ってコメントを書く過程も学習として成立させることである。

このような子どもたちの姿は多くの学校で見られ、教師も元気をもらつた。

工作科でも、表現と鑑賞で活用されている。

重要なのは、ICTの活用が広がつて、授業づくりに関す

ICTの活用が広がつて、授業づくりに関す

科の解説の中で示されて

いる「つくり、つくりかえ、つくる」である。子どもが自ら使いたいものを使ってみる。「少し使い勝手が良くない…」と思つたら再びつくり直す。この一連を一人で体験できるという点も图画工作科ならではである。

また、注目したいキーワードもある。图画工作

で、子どもたちが自身が何かを体験する重要性を改めて認識できたと考えている。友達と一緒に活動することで、材料と向かい合いながら「みんなで何かをしたい！」

子どもたちがカメラ機能で自分の作品を撮影し画像に残し、それに自分でコメントを加えるという取り組みである。

留意したいのは、振り返りは大きな役割を果たす。しかし、体験活動を体験だけで終わってしま

ふりを単なる作業とならないようになることである。大切なのは、作品を撮影したり、言葉でまとめていたりしながら、感じ取れたり考えたりすることだ。画像を撮ってコメントを書く過程も学習として成立させることである。

表現や鑑賞の活動を通して、子どものプロセスの中での体験が有機的に働く。これは教師の働き掛け次第である。育成を目指す資質・能力を明確にして、その上で意図的に指導できることにより、子どもの成長は大きく変わってくると考えている。